

※クリックすると記事のページを開きます。

①王立プノンペン大学への留学(2014-15 年).....	2
-その場所をより深く知る.....	2
-身につけた確かな自信	5
②王立プノンペン大学への留学(2015-16 年).....	8
-違いを乗り越えて	8
-思考回路を知る.....	11
③王立プノンペン大学への留学(2016-17 年).....	15
-心の広さが身に付いた.....	15
-小さいことでは動じない精神.....	20
-私のカンボジア語勉強法	25
④王立プノンペン大学への留学(2017-18 年).....	28
-10 か月の長期留学でないとできないこと	28
-運命のカンボジア語とカンボジア留学.....	34
-青井拓斗さん「Velia（時間割の便利アプリ）」開発インタビュー（2019 年 6 月）	38
⑤王立プノンペン大学への留学(2018-19 年).....	39
-私のカンボジア留学記.....	39
-カンボジアで過ごした 10 ヶ月	44
-行って、感じて、変わった世界	47

①王立プノンペン大学への留学(2014-15 年)

-その場所をより深く知る

小坂翔さんインタビュー

入学前は「カンボジアにこれといって思い入れはなかった」という小坂さん。「今後伸びる地域」として東南アジアに興味を持ったのだそう。入学後はサッカー部で活躍しながらカンボジア語の授業をこなしたというツワモノだ。2 年の時に、王立プノンペン大学（社会学科 3 年クラス）に 1 年間派遣され、帰国後に交流プログラムで通訳をつとめプロ並みの語学力を証明した。

卒業後の就職先は志望通り、東南アジアに関わることでできる会社だという小坂さんに留学体験を語ってもらった。



通訳をする小坂さん

Q:留学しようと思った動機は？

A：海外で勉強することに対して憧れはあって、外大に入ったからには留学はしてみたいと思っていました。カンボジア語を学んでいるのだから、カンボジアについてとことん知りたいと思って、決心しました。

Q:通学手段は？

A:カンボジアは公共の交通機関がまだまだ発達していなくて、プノンペンの中心部には市内バスが走っていたのですが、僕がホームステイしていた家はちょっと郊外にあったので、自転車通学するしかありませんでした。片道 45 分くらい乗ってました。いなきりバイクが横から出てきたり、車が来たりとか。なかなか大変でした。

Q:社会学科の学生は？

A:地方出身者の学生が多かったです。卒業後は教師になるか、NGO 職員になる人が多いそうです。学生のほとんどが

大学で勉強しながら、NGO で働いていたりしていました。みんなとても忙しそうで、なかなか一緒にどこかにでかけるということではできませんでした。

Q:日本人との交流は？

A:プロリーグのサッカー選手の日本人が主宰するフットサルのグループに参加していました。そこでプノンペンに駐在している方々から楽しそうに生活している様子をうかがいました。卒業後に、いろんな道があるのだとわかりました。

Q:カンボジアに対するイメージの変化は？

A:留学前は、貧しいとか戦争の爪痕が残っていると思っていました。行ってみたら、本当にみんな生き生きと楽しそうに生活していて、都市も発展していて、イメージがガラッと変わりました。それにカンボジアの人はいい意味で、力を抜いて目いっぱい楽しむところと、がんばるところを知っているところがいいなと思いました。

Q:留学は自分の人生でどういう強みに？

A:全く文化が異なる地域で生活したという経験は、いろいろな文化に対応できる力を養うことにつながったと思います。カンボジアに行ったばかりのころは、つい、日本の基準を当てはめてしまっていました。授業は7時開始なのに、7時40分くらいに始まったりとか、雨の中、自転車で学校に到着したら、休みの日だったとか。そういう時、日本だったらこんなことないよって思ったのですが、よくよく考えてみたら、日本じゃないんだから、日本の通りに行くわけないよ、と思うようになりました。異文化へ適応していけるようになったのだと思います。

Q:卒論のテーマは？

A:「現代に残るポル・ポト時代の認識—大学生に向けたアンケートを元にした考察—」という題で書きました。留学中に、ポル・ポト時代に関するアンケートを取って、ポル・ポト時代に関する認識とその原因を考察しました。学校教育ではなく、その時代を体験した人々の話を直接聞くことによって認識が形成されているという結論に至りました。祖父母や両親という家族だけではなく、学校の先生からも影響を受けていて、カリキュラムになくても、先生たちは自分の経験や考えを生徒に伝えていることがわかりました。

Q:これから留学を考える後輩たちへ

A:留学してみてよかったです。カンボジア語ができるようになったということはもちろんのこと、実際にその土地に住むことによって、その場所をより深く知ることができます。「自分はその土地に行っても言葉が話せないし、絶対わからない」と悩んでいるくらいなら、行ってみた方がいいです。

-身につけた確かな自信

寺口すみれさんインタビュー

石川県出身の寺口さん。高校3年間の担任だった英語の先生の影響やオープンキャンパスへの参加が入学のきっかけだという。寺口さんは、オーケストラ部でも活躍しながら、留学生のチューターとして、カンボジア人と日本人が一緒に楽しめるイベントや旅行を実現した。王立ブノンペン大学（歴史学科）留学中は、現地で主催されたスピーチコンテストの既修者部門で2位に入賞した。卒業後はIT企業のシステムエンジニア職に進むという寺口さんに、どのような留学生生活を体験したのかを伺った。



Q:留学をしようと思った経緯は？

A:カンボジア語専攻に入学したからには、「カンボジアのことは大体理解している」と自分で思えるくらいまでカンボジアのことを理解したかったんです。日本にいる時も本を読んだり、留学生と交流したりしていたんですけど、日本で会えるカンボジア人はエリート層が多いと感じることもあり、本で得られる情報も人々の普段の暮らしについてはよくわからないと思っていて、留学すればそれが解決されるのではないかと思ったんです。派遣留学は、語学学校ではなく、カンボジア人学生と授業を受けるということだったので、これは今しかできない！と思い、2年の秋に決断しました。

Q:歴史学科に留学したのは？

A:留学を決めたときは、漠然と卒論ではナショナリズムについて研究したいと考えていました。社会科学分野でテーマによっては英語でできてしまう研究がけっこう多い中、カンボジア語を活かせる研究というのは、やはり歴史かなと。でも実際には英語のテキストを使うこともありました。

Q:歴史学科はどんな学科でしたか？

A:歴史好きが集まっている、というわけではなく、学位のために入ったといっている学生もいました。他の学科と比べて、年配の先生が多かったので、講義中心の昔ながらの授業でした。そのほか、学期ごとにグループワークもありました。一つのテ

ーマについて調べ、レポート作成とプレゼンテーションをグループごとにします。はじめのころは、なかなか役に立てず、できる子がまとめてやってしまうかんじでした。これでは何も参加できず、まずいと思いました。少しでも何か担当をもらって、まず自分の力でやって、それを友達に添削してもらいながら、何とかしがみついている感じでした。それでカンボジア語能力も伸びたと思います。

Q:クラスメートはどんな感じでしたか？

A:基本的に地方出身の子ばかりでした。貧しくても、教育を受けることに理解のある家庭の子たちという感じですかね。仲良くなって一緒に遊びに行けたのがすごく良かったです。プノンペン郊外への日帰りの旅や地方への一泊旅行、友人の親戚の結婚式にも行きました。でもたいていは、カンボジアの若者の過ごし方の定番となっている、王宮前の川辺などで一緒におしゃべりする、というのが多かったです。そして、日本で会うようなエリートばかりではなく、日本の普通の大学生と同じななと思いました。卒業後は教員を目指し、採用試験まで英語を教えたり、通訳をしたりしていました。

Q:留学で得たものは？

A:カンボジア人の考え方はポジティブで、お金がなくても楽しむのが上手で、ポジティブに考えることで乗り切っていることも多いと思います。私も、以前のように、ああしなきゃ、こうしなきゃみたいなのはどうでもよくなって、ポジティブに、楽に生きられるようになりました。

Q:卒論について

A:ブン・チャンモル（1916-1975）という革命家の回想録『政治刑務所』を翻訳して、それについて分析しました。先行研究をまとめ直ただけみたいな卒論を書くのはいやだったので、一次資料を翻訳、分析する、という卒論にしたかったんです。

9 月に留学から帰ってきてすぐ、高橋宏明先生の講演がありました。第 2 次世界大戦の日本のフランス領インドシナと関わりに関する講演で、『政治刑務所』も一次資料として使用されていて、資料的な価値が高いこともわかりました。まだ日本語訳はなかったので、翻訳しようと思いました。出版されたのは 1971 年ですけど、書かれたのは仏統治時代後期、30 年代後半から 40 年代にかけてなので、内容がとても難しく、大変でした。でも 5 年間のカンボジア研究の

集大成として、やってよかったと思います。

Q:留学を考えている後輩たちへ

A:語学力は確実につきましたし、歴史の勉強をしっかりとできました。自信を持ってカンボジアについて知っていますと言えるくらいになったと思います。せっかくカンボジア語専攻に入ったのだから、カンボジアのことはしっかり身につけて卒業したいと思っている人にはおすすめです。

②王立プノンペン大学への留学(2015-16 年)

-違いを乗り越えて

岡千尋さんインタビュー

埼玉県出身の岡さん。当初から東京外国語大学を希望していたが、言語までは決めていなかった。何となく東南アジアに興味を持って、「今まで自分が知らなかったことを勉強していくのも面白いかな」としてカンボジア語を選んだという。



Q:留学しようと思った経緯は？

A:高校生の時から大学生になったら留学はしたいと思っていました。国際協力にも興味があって。カンボジアに行って、そういう現場を見てみたいと。どのように関わっていけるのか知りたかったんです。

そういうこともあって、1年生の夏休みにボランティア・ツアーに参加して、カンボジアの農村に行きました。小学校で英語や日本語を教えるプログラムで、シムリアプ州のコムルー村というところでした。電気もなく、水がめに溜めた雨水で水浴びする村で、ホームステイしました。そこで自分が1学期間、苦戦しながら学んだカンボジア語で書いたり、話せたりするのをカンボジアの人たちがとても喜んでくれて、それが嬉しかった。それでさらに勉強に対するモチベーションが上がりました。

Q:地域開発学科を選んだ理由は？

A:私が1期生です。当初は社会学科に入る予定だったんですけど、出発する1週間くらい前に、新しい学科が開設されるから、そちらはどうかと先生に提案されて。地域開発学科と経済開発、天然資源の管理と開発という3つのコースに分かれていて、週3日はコースのクラス16人で勉強して、後の3日は学科共通の授業でした。

学生は、農村出身者が多く、貧困家庭の人もありました。親は読み書きができず、進学するのに親戚に借金していて、「何でまだ勉強続けているの！」と親から文句の電話がかかってくると。また別の人は、6人の兄弟姉妹がいて、上京して進学しているのは自分だけとか。そしてカンボジアのために働きたい、という学生が多かったです。

先生は、フィリピン、タイ、ベトナム、イタリア、オーストラリアなどへ留学して学位をとった方が多かったです。経済開発学科

の先生方は、日本へ留学したことのある先生が多かったです。

Q:印象に残っている授業は？

A:とても熱心な先生が英語の教科書を使っていたんですが、クラスメイトも専門書を読めるほど英語が得意なわけではなくて。でもその先生は、学生が主体的に授業に参加できるよう、4～5人のグループに分け、その教科書を元にして、グループディスカッションやプレゼンテーション、地域でトラブルが発生したときの解決法についての寸劇をしたりしました。

私はプレゼンテーションの担当になったとき、1章分の内容をカンボジア語でスライドを作って説明しました。農村開発に関する章で、地域にあるものを使って開発の資源にする、一村一品事業について書かれていました。カンボジアの事例に当てはめて、陶器で有名なコンポンチナン州だったら何かできるよねとか言いながら、午前中にグループで集まって話し合いました。準備には大変苦労したのですが、やりがいがありました。

フィールドワークの授業は2種類あって、ひとつは、年間通して同じ地域に通い、もうひとつは、毎回違う地域を訪れました。地域住民にインタビューして、その町の抱えている課題を発見し、学生の立場から解決策を考える、というものでした。とても楽しかったです。

Q:忘れられない思い出は？

A:友達です。休みの度にいろんな地方出身の友達の家にホームステイをさせてもらいました。どこに行ってもとても温かく迎えてくれて。ある友人のおばあちゃんから、「もうあなたのこと、本当の家族みたいに大好きだから」って言われて、大泣きしてしまいました。同級生も「小さい時は貧しかったんだ」とか、「家計も、家族も大変だったんだ」と言いつつ、明るくがんばっている姿がとても強く印象に残っています。結婚式や仏教行事をはじめ、伝統的な行事に参加することもでき、カンボジアの人々の生活に対する理解を深めることができました。

Q:留学でわかったことは？

A:富裕層も意外という事です。イオンで普通に買い物をする人や、プノンペン郊外の高級住宅街で生活している人もいるんだなってびっくりしました。同級生とだけ付き合っているとわからなかったことで、とても大きな格差があることがわかりました。

Q:卒論は？

A:カエム・レイさんという、政治評論家が、ちょうど私が留学しているときに、暗殺されて。その時、友達がフェイスブックのプロフィール写真をレイさんの顔に変更したり、喪章を付ける人もいて。プノンペンのお寺に遺体が安置されていて、私も行きました。トゥクトゥクの運転手のおじちゃんも「本当に許せない」と悲しんでいましたし、泣き崩れている人もいました。新聞の報道によると、タケオ州での葬儀には、プノンペンから約 2 万人が駆け付けたいらしいです。人々がどうしてあそこまでレイさんを愛していたのか、なぜカンボジア社会に必要だとされる人物だったのか、というところをまとめたいと思っています。

Q:留学で得た人生の強みは？

A:集合時間に対して寛容なのは単に時間にルーズということではなくて、日本の常識では測れない理由がありました。また、自分のやりたいことを、他人を気にせず、やり切っている面もありました。私もそれに倣いました。それから、人は、とても多様なんだということを知り、それを認め合って、違いは乗り越えられることを学びました。異なるバックグラウンドを持つ人と一緒に何かに取り組んでいくことができるようになったと思います。

Q:語学力、知識の社会への還元

A:カンボジアの人たちは、自分の持っているものが少ない中で、それを最大限に生かそうとして、大切にして生きているということに感銘を受けました。また、「無い」ならば、自分で工夫して生み出す能動的な友人たちの姿に、今までどこか受動的に生きてきた自分自身の姿勢を省みる機会になりました。私も、自分の持つ環境や機会、周りの人々に感謝しつつ、大切にして生きていきたいです。

-思考回路を知る

岡本喜子さんインタビュー

名古屋出身の岡本さん。「東京に来たくて、外国が好きだから、それで東京外国語大学」という思いが膨らむ中、高校2年生でタイに家族旅行で行って、「絶対に東京外大」と決めた。「何か変わった能力を身につけたい」、そんな思いから、東南アジアの言語の中からビルマ語と迷った末にカンボジア語が第1志望となった。そんな岡本さんのカンボジア留学体験を伺った。



Q:入学してみて最初の頃は？

びっくりしましたね。最初はショックで、これだけやらなければいけないんだ、と。そこまで私は言語は好きではなかったなあと、思った時もありました。

Q:苦しい時の乗り越え方は？

結局、最初の春学期は、乗り越えられずに苦しいままで。つまらないと思っていた半年間でも人並みにはがんばっているうちに、段々できるようになって、やる気が出てきて。

「留学は絶対したい」と、1年次の夏の3週間を昔からすごく行きたかったイギリスのロンドンで、博物館や美術館を堪能し「ハッピー」に過ごした。

Q:カンボジア留学の経緯は？

1年の秋に派遣の希望を先生が聞いてくださって、「挑戦してみたら」と言われて、視野に入れてみようと思いました。ちょうど自分でもできるようになってきたと思っていた頃で、1年間行って生活もしてみたくなっただんですね。やっぱりイギリスで3週間過ごしたから。

奨学金の書類選考で、留学の理由と将来にどうつながっていききたいかという作文を書くんです。民話が好きだったので、民話に出てくる道具について調べて、生活に密着した、違う常識についても知っているような人間、道具という視点からの発想を備えた人間になりたいと書きました。

カンボジアの年次は9月始まりで、2年次の岡本さんは、王立プノンペン大学国文学専攻3年次のクラスに留学した。奨学金クラスと私費クラスのそれぞれが、60名程の定員となっている。岡本さんの奨学金クラスは、地方出身者が多く、カンボジア人学生50名に加え、ベトナム人留学生が12、3人いた。ベトナム人学生は固まって後ろに座り助け合っていたが、岡本さんは黒板の見えやすさや助けてくれるクラスメイトもいることから、一番前に座っていた。

Q:印象に残っている授業は？

国文科を選んだのは、一番興味がある文化を知るにはやっぱり国文学かなと。意外とプレゼンテーションが多く、みんなでグループに分かれて、『ソパート』や『パイリンのばら』といった小説を読んで分析をします。

Q: 1940 年代の『ソパート』や『パイリンのばら』を現代の子たちが読むと？

難しいって言っていました。読む分には簡単なんでしょうけど、分析やプレゼンテーションするにはけっこう悩んでました。時代の背景、特徴や文字や宗教も考えて、「難しいなあ」って。儀式や伝統的習慣を読んで「へえ」っていうこともあったそうです。私には、当時の習慣の今の浸透具合はわからないじゃないですか。文学部ではない人に聞くと「よくわからない」って言われて、歴史的な、けっこう難しいところまでやっているんだと肌で感じました。

Q:授業以外の時間の過ごし方は？

ごはんを一緒に食べた後に図書館に行くことが多かったですね。けっこう真面目で。午後に英語があったので、しゃべりながら、みんなで宿題したりしましたね。図書館でみんなでグループワークを話し合っ

本を読むのが趣味の子が、古い音楽も好きなので、熱く教えてくれて。シン・シサモット（1933-1976）のあたりです。伝統舞踊のサークルにも参加したことがあります。見学、体験をしました。

Q:同級生は将来はどういう仕事を？

みんなお給料がいいということで NGO、あと地元に戻って高校の先生が多かったですね。省庁もけっこう多かったですね。フェイスブックで求人情報についてシェアしていて人気なんだって。

忘れられない思い出は、モンドルキリへの研修旅行。滝や落葉樹林があり、高地の寒さを体験し、キャンプファイヤーで踊

った。地元の高校を訪問し、プノンペン大学のPRをしたり、少数民族の村で、言語使用状況や職業、行事、服装などを調査した。

Q:カンボジアのイメージの変化は？

自己主張が強いのかなって、ステレオタイプを抱いていたんです。おとなしい人もいて、どの国の人だからこうじゃなくて、人それぞれなんだと思いました。友達を見ていると、意外とみんな繊細でした。

Q:クラスメイトと日本で再会したショートステイで感じたこと

みんな意外に強気で、いい意味で遠慮していなくて、いいなと思いました。「どこどこ行きたい」ってはっきりあって。主導権を握っていて、けっこう強くて。私が留学していた時はみんなに遠慮していたんです。

Q:留学経験という強み？

何か起こってもドンと構えて、動じないと思います。寛容になりました。みんな、時間感覚も日本とは違って、働きながら楽しそうじゃないですか。それくらいの方が生きやすく、人間的だと思いました。

Q:カンボジアとの関わりをどう還元？

職場で理解に苦しんでいる方がいたら、私だったら東南アジアの方の相手の思考回路がちょっと見えると思います。架け橋というか、仕事がうまくできるような助けになればと思います。

Q:卒論について

「プレア・コー、プレア・カエウ」（聖なる牛、聖なる宝物を意味するポスト・アンコール期ロンヴェーク時代が舞台の伝説）を研究したいです。私は牛がすごく好きで、特に白い牛の哀愁漂う顔が大好きで。文学部で文学を学んできたから、やっぱり文学をやりたいです。

Q:後輩たちへ

留学するかしないかはなるべく早いうちに決めた方がいいと思います。資金面、就活との兼ね合いもありますし、早いこと決断して準備していく方がいいです。私はけっこう早い段階で決断できたんで、4年で卒業できますし、経済的にもすごく助かりました。

③王立プノンペン大学への留学(2016-17 年)

-心の広さが身に付いた

今村友輔さん

(言語文化学部 カンボジア文化研究ゼミ)

東京都出身の今村さん。高校2年生で自分は理系に向いていないと思い始め、当時3歳年上の兄がポルトガル語を専攻していた東京外国語大学を目指すことに。オープンキャンパスでたまたま人の並んでいないブースで聞いた在校生や留学生の話が楽しそうで、そのまま受験したのがカンボジア語専攻だった。3年次から4年にかけて、王立プノンペン大学の国文学部に派遣留学した際の体験を伺った。なお、今村さんは留学前に既にカンボジア大使館主催のスピーチコンテストで入賞している。



Q:留学前に準備したことは？

A:外大に留学生がきていて、一緒によく遊びました。王立プノンペン大学の文学部の一つ上の先輩でした。リクエストされるままに、水族館とか、動物園とか、京都にも2人で行きました。何かしたいことがあったら、遠慮せずに率直にどんどんリクエストしてくるんです。代わりに留学中もすごくお世話になってよく助けてもらいました。

Q:卒論のテーマは？

A:行く前はカンボジアの古典舞踊について調べたいなって思っていました。在日カンボジア留学生との交流会があって、いろいろな踊りをしたのがきっかけです。留学中に調査をする機会が得にくかったので、今は全然違うテーマを考えています。カンボジアのゴミ問題について、とっかかりやすいんじゃないかな、と変えました。

Q:ゴミ問題はこういったアプローチで？

A:日常生活でカンボジアの人、すごいポイ捨てをするんですよ。車の中から捨てたりしていて、どういう考え方したらこういう

捨て方ができるんだろうって。すごい面白いなと。友達のご親族の結婚式に出席したんです。

タケオ州の友達の実家で結婚式が開かれていて、僕も一緒に片付けを手伝ったんです。食べ残しとゴミを含めた常軌を逸した汚さに衝撃を受けて…。分別も何もなく、全部でっかいビニール袋に突っ込んで捨てるんです。ただ持って行ってどっかにまとめて捨てるだけ。

留学が終わる前にカンボジア人の学生に僕がアンケートを作成しました。「あなたはポイ捨てをしたことがありますか？」とか、「何でポイ捨てをしたんですか？」とか。「こんなことを聞いてどうするんだ？」みたいに不思議がっていました。海外に行ったことのある人だったら、そういうことを意識している人が多いなって印象がありました。日本語科の学生で、日本に行ったことがある学生は「日本はすごいキレイだよ」と言ってくれました。

Q:留学中の目標は？

A:純粋に語学力を向上させること。自分が満足できるレベルまで向上させたいなって。そのために読書を一年間継続して行ったりとか、日本語科の学生ともコンタクトを取ってボキャブラリーを増やしたりとか、スピーキング力を付けたりとか。そういうことを一年間やっていました。

Q:留学生としての学生生活は？

A:月、火、水は英語の授業が午後 3 時までで、家に帰って晩御飯前までには予習を済ませて。木、金は授業が終わって、友達とご飯を食べて、一緒に図書館に行って勉強したり。CJCC（カンボジア日本人材開発センター）というのが王立プノンペン大にあって、「日本人ですか？」って声をかけられて、日本語科の学生ともけっこう友だちになって、お互いにカンボジア語と日本語を教え合ったりとかしていました。

Q:授業は大変でしたか？

A:大変でした。教科書を渡されて、教科書の何ページに書いてあることをあなたなりに解釈をして、一人一人、前で発表しなさいと。後はグループワークがあって、グループごとに、1 冊小説を読むとか、歴史の授業では昔の「チバップ・スレイ」を読むとか、与えられた課題に取り組んで発表するという形で。

Q:土日はどう過ごしていたんですか？

A:自分で本屋から買ってきたカンボジア語の本をひたすら読んでいました。子ども用のレベルから始めて、もう何でもかんでも。SIPAR（シパー）というフランスの NGO が出版している本から始めて、もうほとんど読んでしまって。2 箱分ぐらい、全部持って帰ってきました。

Q:留学して日本で抱いていたイメージが覆されたことは？

A:向こうの大学生がすごい勉強に熱心に取り組むということです。やっぱりみんな奨学金をもらって、地方から出てきて、親族の期待を背負っている。自分の勉強に対する責任感というのを日本人よりも自覚していて、自分がかんばらなきゃ家族は幸せにできない、そういう意志が伝わってきて。みんなすごい勉強もがんばるし、熱心だし、そこは純粋に尊敬していました。

Q:みんなどういう進路を目指すんですか？

A: クラスメートが 70 人いて、ブノンペンっ子が確か 2 人しかなくて。後はみんな地方からの学生で。国家公務員を目指す人が多かったです。職業省[労働職業訓練省]とか、文化芸術省とか。教員志望のクラスメートもたくさんいました。

Q:ホームステイ先はどういうご家庭？

A:立派な人たちで、カンボジアの中でもエリートでした。お父さんが社会主義の時代にチェコに 6 年間留学して、薬学を勉強したらしいです。帰って来た時に仕事が見つからなくて、仕方なく専門を切り替えて、今、国際機関で会計士をやっているそうです。お母さんは NGO の局長をされていて。けど、そんな気取った感じはなくて、すごい謙虚な方たちでした。男の子が 3 人いて、長男が 21 歳、次男が 20 歳、一番小さい子が 11 歳。みんなインターナショナル・スクール出身なので、カンボジア語よりも多分英語の方が上手でした。

Q:通学は？

A:バス停が全然なくて、30 分かけて、自転車で通学していました。最初は怖かったです。

Q:日本人との交流は？

A: [カンボジア語専攻の]大先輩がカンボジアにいらっしやっただので、何回かお会いしたり、在カンボジアの日本人の方たちがソフトボールをやっていて、そこにちょっと参加したり。日本企業の方もいたり、あんまり深く知ることはできなかったですけど、カンボジアにもいろんな人がいるんだなという意味では、いい体験でした。

Q:留学中のピンチ、トラブルは？

A: 2 か月にいっぺんくらい高熱と腹痛と嘔吐に悩まされて。けっこう苦しみました。入院するほどじゃないけど、点滴もしました。ホームステイ先の伯母さん（お父さんのお姉さん）がいつも看病してくれて、よく面倒を見てもらい、伯母さんがいなかったらけっこう危うかったかなって思います。

Q:忘れられない思い出、出会いは？

A:文学部の修学旅行で、モンドルキリに3泊4日行って、それがすごい楽しかったです。70人中20人くらいしか来なかったんですけど。すごいでかい滝があって、そこでみんなで水遊びを。

Q:行く前と行った後の変化は？

A:カンボジアがより身近に感じられるようになったっていうのと、より積極的にカンボジアに関わりたいと思うようになりました。もともとすごい興味はあったんですけど、如何せん、よく知らなかったので、向こうに行って自分がより鮮明にイメージできるようになったという。歌とかも、最近ずっとカンボジア語の歌ばかり聴いていて。カラオケも何曲かは歌えます。

Q:留学で得た体験は卒業後の人生でどんな強みになると思いますか？

A:やっぱり適応力と忍耐力、寛容さ。心の広さが身に付いたかなって思っています。普通に2時間とか遅れてくる人もいて。何回電話しても出ないのに、2時間経ったら「やあ！」みたいな感じで来て。

Q:日本人に伝えたいことは？

A:あまりにも礼儀正しくなくてもいいんじゃないかってことです。もっと自分の感情に正直に生きてもいいんじゃないかなって。

あんまり他人に気を遣い過ぎるのも逆に疲れるし、1 分とか、2 分とか、そういう細かい枠組みに囚われすぎるのもよいことなのかってちょっと疑問に思っています。

Q:これから留学を検討している後輩へ

A:もし迷っているなら、絶対に留学はすべきだと思っています。実際に一回行ってみれば身をもって、カンボジアが自分に合っているのか、合っていないのか、より確信が持てると思います。語学を勉強するという面においては、日本でもできることはたくさんあるけど、現地に行って生のカンボジア語に触れ合うというのは、上達のためには大切なことだと思うんです。

-小さいことでは動じない精神

鈴木梓美さん

(国際社会学部)

神奈川県出身の鈴木さん。日本に近いところにありながら、あまり知らないところとして、東南アジア地域にずっと興味があったという。東京外国語大学を受験する際には、ラテン文字ではない文字の言語として、カンボジア語専攻を志望したそう。小学校の時にカンボジアで支援活動をしているボランティア団体の講演を聞いた時の印象が強く残っていて、アンコール遺跡やポル・ポト政権の影響など歴史にも興味があったからだという。3年次から4年にかけて、王立プノンペン大学の開発学部地域開発学科に派遣留学した際の体験を伺った。



Q: カンボジア語専攻に入学して？

A: 最初、全然文字が覚えられなくて、一番文字が書けない学生でした。いつまでも一人で教科書の最初の方をめくって、照らし合わせながらやっていたような状態でした。でも、自分で決めて入ってきたので、ちゃんとやらないとだめだなんて思いました。

Q: 留学をしようと思った経緯は？

A: 1年生の最後、春休みの間に、同期の友だちと一緒にプノンペンとシエムリアップに遊びに行って、「ああ、留学行きたいな」って思いました。カンボジアについて現地に行っているいろいろ学んできたいなと思ったんです。日本でもカンボジア人の留学生と話す機会はあって話していても、話し言葉みたいなのが聞き取れないので、現地に行って日常会話くらいはできるようになって帰ってきたいなと。

Q: 留学中はどのような学生生活を？

A: 開発学部地域開発学科には、インターンシップの授業があったんです。インターン先を一生懸命探したんですけど、日系だと、日本で申し込んで、日本で研修をしてからというので、全然受け入れてもらえない。

韓国系のところに友だちがインターンで入っていたので、紹介してもらったんですけど、カンボジア人に機会を与えたいという。現地の団体をお願いするのも、どこもなかなか難しかったので、結局私は何もやりませんでした。でも、インターンに申し込む前段階として CV を英語で書く練習や、受け入れが決まった後のインターンの予定表や内容に関する書類作成を習いました。

Q:印象的な授業は？

A: 2 学期からはどの授業もカンボジア人が国内でコミュニティワーカーとして働くための知識をつけるための授業となりました。例えば役所に「私がこれからこういうことをしたいので、お許しをお願いします」みたいな書類を作成する練習です。また、カンボジアの政府の成長戦略について学ぶ授業があって、フン・セン首相がどのような政策を行っているかを学ぶため、「成長、雇用、公正、効率のための四辺形戦略」を授業中に読みました。

Q: この学部は将来どういうキャリアを？

A: 多分みんな NGO などの機関で働くことを目指しています。地域の中からだと見えてこない問題、自分がそこにすでにいるからこそ見えない問題を、その地域に自分がコミュニティワーカーとして入っていくことによって、問題を見つけ出して、問題を解決する手助けをするみたいなことです。

1 学期の授業で印象的な授業があって、カンボジアの大学教育のクオリティの向上のために、ドイツ人の先生が派遣されていました。コミュニティワーカーとして働くことについての「紛争解決と平和構築」という英語の授業だったんです。ある程度基礎的なことを教室で学んで、2 学期から授業時間外で土曜日とかに、プノンペンの方にあるチバー・オンパウという地域に視察に何回か行きました。その地域がけっこう貧富の差が激しくて、そのスラム街みたいなところで、カンボジア人もいれば、水上に住んでいる別の民族、川から不法入国した人たち、別ルーツだけどカンボジアで生まれたんだ、という人もいました。そこに視察に行って、どういう問題があるのか、この生活環境は実際にどんな感じなのか、そこで住んでいる人に実際にインタビューする機会がありました。

Q: その人たちと話してみ?

A: 私は水上生活の人たちがいるところに行っただけです。船に上がらせてもらって。水上に住み始めたのは、土砂崩れに見舞われて、そのままプノンペンの方へ避難してきたんです。水上は本当は住んではいけないというか、そのうち警察が来て、また追い払われるのが怖いと言っていました。魚を採って生活はしていますが、その魚も自分たちが食べるだけの分だけです。お金とかは、上陸してプノンペンに出稼ぎに行っている人たちとかの仕送りしか現金収入がなくて。奥さんが生活習慣病みたいのを何重にも患っていて、糖尿病だし、心臓も悪いし、でも薬も十分に買えないから、たまに発作が出て死にそうになることもあると言って、その時にちょっと奥さんが泣いていたんです。話を聞く以外に何もできないし、ちょっと辛いなと思いました。子どもたちも住民票をそもそも持っていないくて、文化的な理由もあると思うんですけど、公立の学校には行っていないくて。政府からは目もくれない。

Q: クラスメイトはどういう感じ?

A: 半分は奨学金をもらっている人で、半分は、私費で学費が払えるレベルの家庭からで、クラスの学生の間にもちょっと貧富の差がありました。英語を授業時間外でも勉強しに行っているみたいでした。英語ができた方が確実に就職にも有利なので。

Q: 留学中の忘れられない思い出は?

A: 学校の旅行で、ストウントレン州に行っただけです。みんなにお金がない過ぎて、参加するのを渋っていました。ラオスとの国境の辺りまで行っただけです。エコツーリズムをしようみたいな感じでしたが、もはや野宿だったんです。一晩目は普通の民家をお願いして、雨とか避けられるんですけど、夜になると虫がいっぱい入ってきて。蚊帳の隅のところからもニョロニョロ入ってくる感じで。朝起きるともうそこら中、メー・ブリアン[羽虫]だらけで。友だちは「これ、美味しいんだよ」と言っていました。2日目、3日目は完全に野宿で、エコツーリズムだし、節約しようみたいな方向で、テントを張って、川辺に寝ていました。3日目は川の中州にある島みたいなところに行って。夜テントの中にいたら、水牛が来てドスドスして、ひとしきり糞をした後、どっかへ行きました！ちょっと怖かったです。でも男の子たちが、田舎で飼っていて慣れているのかもしれないけど、追い払ったりして。

2日目は農業用の車に荷物を乗けて、無理して10人ぐらい乗って。けっこう馬力がすごくて、それで森の中の道なき道

を突き進んで。運転手がガイドでみんなで森に入って、一回道に迷って、心配になったんですけど。森の奥に住んでいる人
たちを訪問しました。

Q: 訪問してみて？

A: 「ここでどんな暮らしをしているの？」とか「今後エコツーリズムについて、どのように考えていますか？」って。地元の人たちはあまり考えていなくて、川で魚を採ったりとか、ちょっとだけ豚を飼ったりとか。その日暮らしてみたいな感じで。多分、その村の中心部的なところが盛り上げようとして、エコツーリズムっていうのを打ち立てたんだと思うんですけど、「自然が豊かだね」だけで終わっちゃっているみたいなのがある。

Q:カンボジアに対する印象の変化は？

A: 1 年生で旅行した時はプノンペンとかシエムリアプしか見ていなかったんで、けっこうカンボジアも発展してきているのかなとか思ったんですけど、やっぱり田舎は田舎なんだなって思いました。私たちが「エコツーリズム」と称して行った時、水浴びするところも足りないから、川で水浴びみたいなの。クロマー[格子柄の手拭い]を巻いて、みんな、川で水浴び。しかも電気も通っていないし、wifi もないので、外部との連絡を絶つみたいな状態で。

Q: 留学中のピンチやトラブルは？

A: 私は何のトラブルもなかったです。一回、ナイトマーケットにいる時にカバンのポケットを開けられたんですけど、咄嗟に気付いたので、何も取られなかったです。普段私、お金を持ち歩いていなくて、お財布とか持っていたんですけど、中に多くても 3 ドルくらいしか入っていなくて。

Q: 留学で得た体験は、卒業後の人生にどんな強みがあると思いますか？

A: カンボジア人はフレンドリーなので、その中にいたら、文化背景が違う人でも留学前より臆せず話せるようになったかと思っています。日本では知らなかったことをいっぱい知ったと思うので、卒業後に多分いろいろあると思うんですけど、小さいことではそんなに動じない精神が身に付いたかなと思います。

Q: 卒論は？

A: 卒論のテーマは今も迷い中なんです、行く前は女子教育について研究したいと思っていました。カンボジアで結構苦しい経済状況の中で、大学にいる女子学生たちがどうして大学まで上がってこれたのか、を研究したいって思っていたんです。卒論にまとめられるほどの積極的な調査はしていないのですが、私の友達を通してどういう子たちが学校に来ているのかなってというのはわかりました。国の政策と絡めて、教育についてやりたいなと、今考えているところです。

Q: 留学を検討している後輩たちへ

A: 今はカンボジア語の予習、復習とかばかりで、カンボジア語なんて楽しくないと思ったりすると思うんです。でもカンボジア語はただ予習、復習のためにあるわけじゃなくて。現地に行って、いろんな人と話して、言語をツールとして使って、カンボジアの人たちの考え方とか文化を知っていくことも大事だと思います。もし機会があって、カンボジアに行ったら、いい経験ができるんじゃないかと思います。

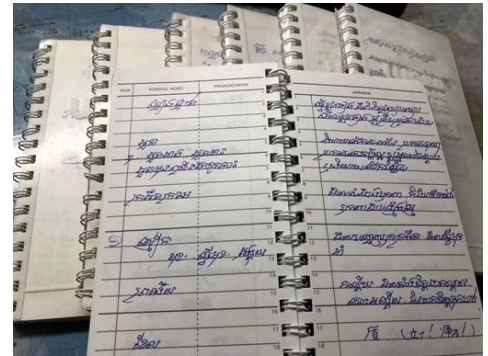
-私のカンボジア語勉強法

今村 友輔

(言語文化学部カンボジア語専攻 4 年)

留学決定、そして改心

大学に入学してから 2 年生の春学期が終わるまでは、部活動が忙しかったこともあり、私はカンボジア語の勉強にそれほど真剣に取り組んでいませんでした。授業で与えられた課題を最低限こなす程度でした。ネイティブの先生の授業でも、半分ほどしか聞き取れていませんでした。



しかし、2 年生の秋学期に、王立プノンペン大学（RUPP）文学部への留学が決定してからは、それまでのカンボジア語に対する姿勢が一変しました。

ある授業で、岡田先生がおっしゃった「留学前にこそできることはたくさんある。現地で単語を覚えながら留学するよりも、日本で単語を覚えてから行った方が上達する」ということをきっかけに、自分で語彙を徐々に増やしていこうと決意しました。そして、『カンボジア語実用会話集』という書籍を購入し、空き時間を使って新しい単語を覚えていきました。

もうひとつの大きな転機となったのは、RUPP からの交換留学生、ソピアのチューターを務めたことでした。チューターを務めた当初は互いのこともよく知らず、何を話したら良いのかもわからずにいましたが、気づいたら仲良くなっていました。ソピアとの普段の会話ではカンボジア語を使う場面が多々ありましたが、ソピアは私が聞き取れるように簡単なことばでゆっくりと話してくれました。朝から夜まで一緒にどこかに遊びに行った日は、長時間にわたってカンボジア語を聞かされ、非常に疲れました。しかし、回数を重ねるにつれ、カンボジア語を長い間聞くことがさほど苦痛でなくなりました。一方で、私のカンボジア語のスピーキングも、言いたいことはざっくりと伝えられるようになりました。また、自分の発音に自信がなかったため、カンボジア語の母音・子音の発音の矯正をソピアに手伝ってもらいました。この時から意識するようになった発音の細かい点が、その後のカンボジア語の学習に良い影響を及ぼしたと感じています。さらに、ソピアは、私が RUPP へ留学した時に同年代の学生と仲良くなれるように、カンボジア語の流行りことばやスラングも教えてくれました。

その他に自主的に行ったのが[東京外大のモジュールの活用](http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/km/)（<http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/km/>）です。文法モジュールをカンボジア語の発音・文法の確認に役立てました。会話モジュールは、全 40 課のうちいくつかの課はネイティブの先生の授業で学習済みでしたが、コツコツとすべての課を自分で学習し、聞き取れなかった部分は何回も聞き直しました。

振り返れば良い思い出、スピーチコンテスト

2016 年 7 月、在日本カンボジア大使館でカンボジア語スピーチコンテストが開催されました。私は、「京都とシェムリアップ」というテーマをすぐに思い浮かべました。というのは、スピーチコンテストの前月に、ソピアと 2 人で 1 泊 2 日の京都旅行をしたため、私の頭の中で「カンボジア」ということばに、「京都」ということばがぴったりと当てはまりました。私は辞書をめくりながらスピーチの原稿を書き、ソピアが文法の間違いや不自然な箇所を直してくれました。原稿を書くよりもつらかったのが、スピーチを読み上げる練習でした。来る日も来る日もソピアの指導のもと、スピーチの練習をしました。直接会わなかった日は、LINE の通話越しにスピーチを読んだこともありました。私が「もう十分練習したはずだ」と思っても、ソピアは「この発音が違う、ここは一拍置くべきだ」などと細かい点も指摘し、一切の妥協も許しませんでした。スピーチの準備は大変でしたが、ソピアの懸命な指導と、私の反復練習が実を結び、本番では 3 位を受賞することができました。このスピーチコンテストでの受賞は留学前の自信となりました。

甘くなかった本場のカンボジア語

様々な準備をし、スピーチコンテストで自信を身に付けて留学に臨みましたが、いざ留学が始まると苦勞の連続でした。

その中でも大変だったのが、周囲の人間の話していることがそれまで日本で聞いていたカンボジア語とは違っており、理解できないことでした。話し言葉の速さ、省略に驚き、ひいては地方のカンボジア人たちの方言は別の言語に聞こえる時もありました。

授業では、ゆっくりとわかりやすく話してくれる先生と、訛り調でマシンガンのようなスピードで話す先生がおり、聞き取れる時と聞き取れないときの差が顕著でした。クラスメイトのカンボジア人同士の会話に関しては、そのスピードに全くついていけませんでした。

できないことを焦っても仕方がないと思い、授業終わりにクラスメイトのノートの写真を撮らせてもらったり、相手の言ったことがわからなかった時は、正直にわからないと伝えてもう一度言ってもらったりしました。次第に、クラスメイトも私のカンボジア語のレベルをはっきり理解したうえで話してくれるようになりました。

毎日意識していたことは、「間違いを恐れずに、自分から積極的に話す」ということでした。

留学ならではの取り組みとその成果

文学部の授業では、有名文学作品の内容や登場人物が、先生の話に登場することが多かったため、各作品の内容、せめてあらすじだけでも知りたいと考え、大学の図書館や町中の図書館で文学作品やその要約集を入手して読みました。トム・ティアウの原文など、韻文で書かれているものは理解が難しく、時間を要すると判断し、あらすじだけ読みました。その他にも、語彙増強や読解スピード向上のために、SIPAR の書籍、アンコール王朝の歴史に関する書籍なども習慣的に読みました。安全上の懸念からホストファミリーに深夜の外出を禁止されていたうえに、夜間に遊びに行ったり外食に行ったりすることが日本と比べると少なかったため、放課後は読書に多くの時間を費やしました。

文学部の友人の影響でシン・シサモットの歌が好きになり、YouTube で歌詞付きの動画を見つけると、その歌詞をスクリーンショットで携帯に保存して覚えました。文学作品とシン・シサモットの曲の歌詞から、花の名前、王族用語、美しさや感情に関する表現を学んだおかげで、簡単な冗談を言って周囲のカンボジア人を笑わせることもできるようになりました。

もうひとつ、自分のカンボジア語の上達に大きく寄与したのは、RUPP の日本語科の学生との交流でした。日本語科の学生が授業で利用している日本語の教科書の内容をカンボジア語で説明する手伝いなどをすることで、難しい語彙、文法の知識が増えました。加えて、日本語学科の友人と遊びに行った際には、日本語を交えながらカンボジア語・カンボジア文化を教えてくれる一方で、私はカンボジア語で友人に日本文化を教え、文学部とは異なる方法でカンボジア語を学ぶことができました。

私は、1 年間ずっとハンドサイズのメモ帳を持ち歩き、読書中知らない単語に出会った時、歌詞で好きなフレーズを見つけた時、友人に新しいことばを教えてもらった時など、ことあるごとにメモ帳に書留めました。結果、1 年間で 7 冊のメモ帳を消費しました。この地道な努力が実って、語彙が大幅に増えたため、留学の後半からは、カンボジア語－日本語辞書に加えて、カンボジア語－カンボジア語辞書も使えるようになりました。

時間を気にせずに自分の好きなカンボジア語の本を読み漁ったり、現地の様々な学部の学生と日常的に交流したりするのは、留学中だからこそできるカンボジア語学習方法だと思います。

これまでのカンボジア語学習から、「地道に取り組む姿勢」と「好奇心」さえあれば、自然とカンボジア語は上達していくということを学びました。語彙であれ、会話であれ、「A ができるようになったけど、B はどういう風に表現するのだろうか?」、「A の類義語、対義語にはどのような単語があるのだろうか?」などと常に好奇心を持ちながら、焦らずに毎日コツコツと取り組むことが一番大切だと思います。

④王立ブノンペン大学への留学(2017-18 年)

-10 か月の長期留学でないとできないこと

井上令菜さん

(言語文化学部)

東京都出身の井上さん。中学 1 年生から 2 年間、父の海外赴任のためにオランダで暮らし、休日は近隣のヨーロッパの国々、長期休暇ではスペインや中東、エジプトを旅行で体験。帰国後、国際的な志向を持った高校へ進学し、大学ではヨーロッパ以外の言語を深く勉強してみたいと思っていたところ、先生から東京外国語大学を勧められる。「これからは東南アジアだ」という世界的な傾向もあり、その中で一番行きたいと思ったのは、世界遺産アンコール・ワットのあるカンボジア。卒業後も視野に入れて、話者数の少ないカンボジア語に決めたという。王立ブノンペン大学国文学科へのショートビジットを経て、さらに 10 か月間の長期留学した際の体験を伺った。

Q:留学に行こうと思ったのは？

A:入学したときから、何となく留学には行きたいと思っていました。まず、自分が選んだ言語をちゃんと話せるようになりたかったし、また日本ではないところで、自分とは違う考え方をを持った人たちと暮らしてみたい、同年代の人たちがどんな生活をしているのかを知りたいな、と思っていました。オランダにいたときは家族と一緒に暮らし、日本人学校に通い、オランダの中にある日本人コミュニティで生活していたんです。それは旅行とあまり変わらないのかなと思っていて。一人暮らしもしたことがなかったので、留学は人生のよい経験の 1 つにもなると考えました。家族は以前から留学については積極的に応援してくれていました。

高校の時、志望をカンボジア語専攻にするって決めたときは、家族には、スペイン語とかフランス語をやればいいのにと、すごく反対されました。「地雷がまだいっぱい埋まっている」とか、内戦のイメージが強かったんだと思います。最終的には「やりたいことをやりなさい」と言ってくれました。インターネット等で調べたり、カンボジアを特集するテレビ番組を観たりして理解をしてくれたんだと思います。

Q:ホームステイ先はどんなご家庭？

A:大学の国文学科で教えている女性のロアト先生の家でした。ロアト先生のお母さんが同居していて、下の階にも同居人がいました。留学に行ったらすぐ、ロアト先生とお母さん、ポー先生（現東京外国語大学客員教授）たち先生仲間と一緒にバスで国内周遊旅行に行きました。シムリアップ、バンテアイ・ミエンチェイ、バットアンバンです。すごくよかったんですけど、迷子騒動があって。最初、迷子になった誰か探しに行ったら、自分が迷子になって、バンテアイ・チュマー遺跡の一番有名な千手観音の像が見られなかったんですよね。もう1回行きたいなと思っていますが、誰かカンボジア人と一緒に行かないと行くのが大変な場所です。

Q:通学は？

A:バスでも行けますが、時間に余裕がないといけなかったので、自転車通学でした。暑いときや、雨のときは、パスアップというオートリキシャ配車アプリを使っていました。すごく便利でした。

Q:留学生としての学生生活は？

A: 王立プノンペン大学国文学科の奨学金クラスは私を含めて63 人生徒がいて、ラオスから1 人、ベトナムから17 人来ていました。ラオスの学生は教師になりたいと言っていました。ベトナム人学生は、ベトナムのカンブチア・クラオム出身者が半分くらいで、両親がカンボジア人で、きれいにカンボジア語を話せる人もいました。プノンペン出身者は一人で、地方、農家出身の人が多かったです。人を雇って農作業をしている農家出身の人もいれば、生活が苦しい家庭の出身の人もいました。

西洋文学の先生は担当する週3 時間のうち、1 時間はカンボジア人だけ、1 時間はみんなと一緒に、1 時間は留学生向けというように、学生の勉強する時間は2/3 になるけど、内容は濃くするよ、というスタイルで別にクラスを設けてくれました。ヨーロッパの格言がカンボジアに訳してあるのを読んで学ぶ授業でした。私がいたので、「日本ではどう？」とそれらを比べて、「カンボジアはまだまだだから、がんばりなさい」という授業でした。その先生も確か日本に留学していたと思います。

Q:他に印象に残っている授業はありますか？

A:作家でもあるユー・ソピア先生の「クメール文化」という授業が前期にあったんです。先生のご著書も含めて、カンボジアで

大人気らしい『新しい太陽が古い大地に昇る』（スオン・ソルン 著、1961）など 6、7 冊を、グループに分かれて、読んで分析、さらに、その一部分を劇で表現する、という授業でした。私のグループは、ポスト・アンコール期の武将の物語『デチャー・ヨート』でした。要約をして、先行研究を図書館で調べて発表しました。先生は淡々と学生の分析に対してコメントしてくださいました。8 人くらい



授業での劇

の大きいグループだったので、劇は主要な役の 4 人くらいがセリフを覚えて練習して、私はその従者役で出ました。剣など小道具を作ったり、伝統衣装のクバン[一枚の布を腰に巻き、股下をくぐらせズボンのようにする]を着付ける様子も見られました。普通の授業では、ソピア先生は淡々と板書していく、学生はひたすらそれを写すという授業でした。ソピア先生のこととは「ちょっと変わっている先生」ってみんな言っていて、先生というよりはやはり作家という感じがしました。

Q:放課後はどのように過ごしていたのですか？

A:みんな午前中は国文学科で勉強して、午後は英語（2 時間程度）というスケジュールでした。お昼は、食堂で食べたり、お弁当を食べたり、家に帰って食べる人もいました。英語の課題等を一緒にやったりして過ごして、前期は一緒に英語に行っていました。今考えれば、後期も受ければよかったと思います。後期は図書館等に行くようにしていました。でも後期は暑くて、家に帰って昼寝等もしていました。学校帰りに自転車王宮前の川辺の方まで行ったりもしていました。みんなは英語がない日はアルバイトをしているみたいでした。

Q:日曜日や休日はどう過ごしていたのですか？

A:英語の授業を履修していたときは、課題の発表がすごく大変で、けっこう準備をしていました。それがなかったときは、友達にいろいろ遊びに連れて行ってもらいました。ウドン、タ・マウの動物園、プノム・チソー、トンレバティとか、ちょっと遠出もしました。

国文の人たちが出場するようなサッカーの試合があるときは、夕方になって服を着替えて、学校の敷地内にあるサッカー場へ観に行くこともありました。学科毎にサッカーのチームがあって、リーグ戦をやっていたんですね。

プノンペンから北東にバイクで 2 時間くらいかけて、コンポンチャム州の外れのクラスメートの家に行き、お昼ごはんをつくって

食べる会もしました。私が好きな、卵とプロマー魚のプロホック[塩漬けにした魚の発酵調味料]を茶碗蒸しのように蒸す料理をつくりました。それはとても塩辛いので、生野菜と一緒に食べます。

年末にロン島という、欧米人に人気のシアヌークビルのリゾート地の島へ行きました。国際関係を勉強している日本人女子学生が宇都宮大学から王立プノンペン大学英語学科に来ていて、学部も住んでいるところも違うので普段あまり会えなかったんですけど、一緒に旅行しました。

タケオ州で友達の結婚式があって、知り合いではない方の家に泊めてもらったこともありました。帰るときにはみんなでお金を集めてその家のおばあちゃんに渡したのですけれど。

Q:修学旅行は？

A:モンドルキリ州へ行きました。少数民族がかつて着ていた衣装を着たりもしました。その人たちは今は私たちと変わらない服装をしています。でも昔ながらに森で収穫したものを背負い籠に入れて市場に売りに来ていました。その他、滝や樹海のようなところなど、いろんな観光名所に行きました。夜は疲れていてもう寝たいのに、連夜みんなでずっと踊りました。スピーカーも持ってきていて、すごく準備がいいんですね。

Q:留学中のピンチ、トラブルは？

A:一番辛かったのがアメーバ赤痢になったことです。前日に食べた、道端で売っている貝だと思います。加熱はしてあるようでしたが、口に入れたときから、身体が受け付けられない味がして。先生のお友達が持ってきてくださったものだったので、食べざるをえない状況でした。深夜に嘔吐して、そこからもう寝ていられないかんじだっ



修学旅行で行ったモンドルキリで

たのですが、誰も起こさないで、そのまま朝までがんばりました。翌朝、病院に行って、2〜3 日ほど休みました。その病院は、受付は日本人が対応してくださるんですけど、診察では外国人医師に自分の症状を英語で説明しなければいけなくて。処方箋をもらったんですけど、これで果たして合っているのだろうかという不安もありました。まあ、治ったのでよかったです。しかも、同じ週にデビットカードを ATM に差し込んだら、吸い込まれたまま、出てこなくなっちゃって。もう銀行は閉まっていて、とりあえず、カードを止めて、日本に電話したんです。デビットカード専用窓口が開いていない時間で、どうすることもできなく

て不安でした。次の日行ったら、何事もなくカードもちゃんと返ってきました。それからは銀行の営業時間に ATM を使うようにしました。学校に新しくできた ATM は、完全にカードを入れないタイプで、手数料は高いんですけど、それを使っていました。

Q:2 週間のショートビジットと長期留学、双方を体験してみてどうでしたか？

A:やっぱり 2 週間のショートビジットだと、授業のことがちんぷん、かんぷんって感じでしたね。私のときは学期始まりの第 1 週目とか、第 2 週目とかの導入みたいなタイミングだったので、深く学ぶことはできませんでした。長期留学では授業前にテキストが配られて予習していけるので、半分くらいは理解できたと思います。また、ショートビジットのときは、日本に興味がある学生はすごく話しかけてくれるんですけど、教室の座席によってはアウェイな感じがありました。長期留学のときは、座席がいつも決まっているんですね。座席近くの学生に助けを求めていると、段々仲良くなっていったりして、それはやっぱり 10 か月いないと、できないことなのかなって思いますね。

Q:留学してみて物足りなかったことは？

A:英語と一緒に勉強していた学生が日本にとっても興味があって、日本語を教えて欲しいと言われ、かなり後になってから教えることになりました。すごくやる気がある学生で、いろいろサポートしてあげたいと思っても、時間の調整がうまくいかず、時間があまりとれませんでした。しかも、全国選挙キャンペーンが始まる前に、学期終了とともにすぐ帰国しなければならなかったんで、テスト勉強しつつ、荷造りしつつで、あわただしかったです。

Q:卒論のテーマは？

A:例えば日本語では「甘い」という形容詞を「甘い声」のように味覚ではない意味として使います。日本語の事例における論文を読んで面白かったので、それをカンボジア語でやろうかなと考えています。元々言葉の意味に興味があって、「似たような意味だけど、どういう違いが細かいところにあるか」というのをやりたくて、いい素材がないか探しています。

Q:将来の目標は？

A: 今後も東南アジアに関わっていきたいなと思っています。国が発展するためにただ支援というのではなくて、日本の企業

も利益を得られつつ、向こうのためにもなるような仕事をしている企業に就職したいなと思っています。興味があるのが、建設、建築、あと産業に必要な物の整備をするプラント・エンジニアという仕事です。カンボジアで日本橋等の前を通ると「これ、日本が造ってくれたんだよ」って何度も言われました。そういう経験から「こういうのって役に立つんだな」と思って、インフラに興味を持つようになりました。

言葉自体にも興味があるし、やっぱり現地語を話せると距離感が全然違いますよね。もし将来海外赴任できれば、その国の言語は勉強したいと思っています。

Q:これから留学を検討している後輩へ

A:もし金銭面的にも可能で迷っているのであれば、絶対に行った方がいいと思います。やりたいことをちゃんと決めていけば、有意義な時間の過ごし方ができます。特にカンボジア留学は、留学中に時間的な余裕もあるので、大学の授業以外にやりたい活動があるといいかもしれないですね。

-運命のカンボジア語とカンボジア留学

青井拓斗さん（国際社会学部）

岡山県出身の青井さん。父の仕事で、小学生時代の多くの時間を中国の広東省・広州で過ごし、東京、北京、上海というアジアの大都市を体験する。当時、タイやベトナムへの家族旅行で、「見渡す限り建設中の、日本とは全然違う活気」を目の当たりにしていたことから、「将来そういうところで人生を歩めたら、日本にずっといるよりは楽しいのではないか」と東京外国語大学カンボジア語専攻に入学。海外留学を考えたことのなかった青井さんが、2年次から3年次にかけて、王立プノンペン大学開発学部地域開発学科に派遣留学した際の体験を伺った。

Q:カンボジア語専攻に入学してみてどうでしたか？

A:カンボジア語に決まったことは運命かなと思って、本気でがんばりましたね。他の同期よりも1番を取るしかないな、と。例年は女性が半数を超えることが多いカンボジア語専攻では11名中、男性が7名という珍しい学年でした。

Q:留学をしようと思った経緯は？

A:1年生の11月上旬くらいに、カンボジア語専攻の先生から留学について考えてみないかと言われて。王立プノンペン大学からの学生たちがショート・ステイで外大を訪れていたときに、僕が彼らに積極的に話しかけていたからだそうです。そのときまでは留学するつもりとか、全然なかったんですよ。これも運命かな、と。先輩も2人ほど行っている開発学部の地域開発学科を勧められました。「地域開発」と日本語で聞いても何をしているか最初は想像ができなかったので、面白そうだなと思いました。1年間でいろんなカンボジアを体験しようと考えていました。

Q:留学中はどのような学生生活を？

A:自転車で25分くらいかけて通学していました。交通ルールは意外と乱れているように見えて、その中に秩序がありました。ハンドサインみたいのがあるんですね。「こっちに曲がるよ」みたいな。

授業は午後1時から始まって、長い日は5時半くらいまでありました。1コマが3時間なのですが、先生によって時間をどれくらい使うかは異なります。僕は2年生のクラスに入ったので、統計学とか、開発理論とか、あと法律、人類学などの理論や基礎を学びました。

日本への留学経験を持つ先生がおられて、いろいろ気を遣ってくださったのが嬉しかったです。他の先生は割と時間にいい加減だったりして、腹が立つこともありました。でも本当に怒っているクラスメートは全然なくて、「来ないね～」みたいな感じで。「これがカンボジアか、これも経験」と思いました。

Q:授業についていくのは大変でしたか？

A:グループワークがすごく多かったです。けっこう友達に助けてもらいました。原稿がほぼできたものをもらって、「これをちょっと変えて読んでね」とか。教科書は英語で書かれていて、友達も英語がすごく得意というわけでもなかったんで、僕がカンボジア語で説明してあげることで、通訳ができるようになりました。

Q:クラスメートはどういう感じでしたか？

A:普通は奨学金クラス、と普通のクラスと分かれています、地域開発学科は人数が少ないので分かれていませんでした。だから奨学金をもらっている人もいるし、お金持ちの人もありました。プノンペン出身の学生はいなかったです。モンドルキリ州の少数民族の出身の学生もいて、母語が違うので、あまりカンボジア語が上手ではないんです。イスラーム系のチャム人もいましたし、人種のるつぼみたいでした。お坊さんもいました。上座部仏教の僧侶は女性に触れてはいけないと聞いていたのですが、普通に女の子としゃべっていたりして。それに、高価そうな iPhone も持っていて、お坊さんでもけっこう自由なんだな、と思いました。

Q:フィールドワークみたいな課外授業もあったんですか？

A:社会問題を考える授業で、グループのテーマが都市の渋滞についてだったので、プノンペンの公共交通機関を調査しました。メコン河を使った通勤用フェリーや、路線バスとか。交通についてのインタビューも行い、バスを利用すれば学生は無料なのでバイクなどよりはコストがかからない、などを発表しました。

Q:研修旅行もあったそうですね

A:車で 3 時間のカンポット州に行きました。海の近いところで、訪ねた集落はみなイスラーム系でした。海が近いから、昔、船でイスラームの教えが伝えられたのだそうです。40 歳くらいの女性が英語で積極的に話してきました。地方でも英語を学

ぶ機会があるのだとわかって驚きました。家族は出稼ぎで、一人暮らしをしているおばあちゃんにもインタビューをしました。畑があって、鶏を育てていて、ほぼ、自給自足みたいな暮らしをしていました。

地域開発学科の学生だけではなくて、開発学部の天然資源開発・経営学科、観光学科の学生も一緒に行ったので、エコツーリズムのような感じで、マングローブ林の植樹もやりました。本当に何も無い高原まで行ったので、どこに泊まるのかと思っていたら、「ここに泊まるよ、テント運ぶから手伝って」って言われて。そこで1泊、野宿をしました。



マングローブ林で植樹活動に参加した時の様子

Q: 余暇はどのように過ごしていたのですか？

A: 授業後は、クラスメートは英語の塾など、ほかに授業料を払って勉強

していたので、僕はまっすぐ帰宅して夕食を食べて宿題などをしていました。夕食は家族全員揃って食べるのではなく、好きなタイミングで食べていました。ただ、毎週末の朝は必ず家族そろって麺などを食べに行きました。週末の空いている時間は、市場をまわっていました。車の部品や電子部品を売っているところとかです。コンピュータをいじるのがけっこう好きなんので。

カンボジアにもリゾート地があるっていうのを知らなくて、一人旅でシアヌークビル州にあるロン島に行ったこともありました。そこはもう、カンボジアじゃなかったです。西洋人ばかりで、オーストラリア人からカヌーを借りたり、経営も全部西洋人ばかりで、他の国に来たような気がしました。物価は安いですよ。バンガローは、クーラーとかない、木の小屋みたいなのが、1泊15ドルでした。食事はハンバーガーとかで、カンボジア料理はないですね。すごく長いビーチがあって、ゴミが全然落ちていないんです。地元のカンボジア人とけっこう話したんですけど、その人たちの意識が高くて、落ちていたら拾うそうです。「自分たちのビーチは汚さない」みたいな。

Q: 留学中に困ったことはありましたか？

A: 思い当たることはないですね。すごく安全で。食べ物も危なそうなものは絶対食べなかったんで、1回もおなかを壊したことがなかったです。1回、重めの風邪に罹って、調子が悪くなったぐらいです。

Q: 卒論について考えていることはありますか？

A:カンボジアの文字コードの取扱いとか、インターネットでのカンボジア語、コンピュータ上でのカンボジア語の取扱いに興味を持っています。カンボジア人はローマ字でカンボジア語を表現したりもします。そういうのも調査したいです。日本語と全然違って、コンピュータでも取扱いがけっこう特殊で、多分、そのために特別にプログラムとかを書かないといけないんです。でも、カンボジア語って話者数が少ないので、けっこう蔑ろにされがちなので、もっとスポットライトを当ててほしいです。

Q: 将来、どのようなことをしたいと思っていますか？

A:カンボジア語やカンボジアに関わるようなサービスを実際につくりたいです。やっぱりカンボジアの地方では、教育があまり進んでいませんが、スマホは持っているんですよ。そういうのを活用した教育システムなどをつくりたいです。そして、10年後、20年後のカンボジアを見てみたいです。プノンペンはこのまま成長していくと思うんですけど、どんどん地方との格差が広がっていくかな、とは思っていて。それがカンボジア全体として、どう影響していくのか、知りたいです。

カンボジアのためにも、観光という側面からカンボジアを全然知らない人にやっぱりアピールしていきたいですね。エコツーリズムはカンボジア人の人材を開発するというのが重要だと思います。最近、カンボジア政府もそういった面に力を入れるようになっていきます。

Q: 留学を迷っている学生にメッセージを。

A:一般に「留学行っていた」と言うと、英語圏と絶対に思われるので、「カンボジアに留学した」と言うと興味を持たれます。カンボジアでボランティアをした、という人は多分いっぱいいるので、そうではなくて、地元のカンボジア人学生と一緒に1年間大学で学んだ、という経験をした人はあまりいないですよ。社会人になって海外やカンボジアに1年行ける機会は、なかなかないですし、今迷っているなら、行った方がいいと思います。

-青井拓斗さん「Velia（時間割の便利アプリ）」開発インタビュー（2019 年 6 月）

本学からカンボジアに派遣留学をした青井拓斗さんが時間割の便利アプリ「Velia」を開発しました。

開発に至るまでの経緯などインタビューが TUFS Today に掲載されています。

詳細は[こちら](#)から。

⑤王立プノンペン大学への留学(2018-19 年)

-私のカンボジア留学記

言語文化学部 カンボジア語専攻

都崎 理菜

2018 年 9 月から 2019 年 7 月までカンボジアで生活をしました。首都プノンペンに暮らし、王立プノンペン大学に通う毎日とはとても刺激的で「あたりまえ」があたりまえでないことを肌で感じました。そのかけがいのない日々を少しの一端をお見せします。

学校生活

王立プノンペン大学はプノンペンの北西部に位置し、発展した川沿いのエリアからは少し離れた静かな場所にあります。周りには様々な屋台やカフェがあり学生たちのたまり場となっています。学校の中は外国語研究所、という言語を学ぶ学部の集まるエリアと、その他の学部のエリアがあります。私は社会人文学部国文学科（クメール文学）の3年生のクラスで1年間、勉強しました。



4 階（カンボジアは「地上階」を数えるので、ここでは日本の 5 階に相当）まである校舎でエレベーター、エアコンなし。

授業中は天井のファンと自然の風で暑さをしのぎますが、停電になってしまうと地獄です。

国文学科は 5 クラスに分かれていて 1 クラスが奨学金クラス、他 4 クラスが私費クラスとなっており、私は奨学金クラスに入っていました。クラスはベトナム人が 16 人、ラオス人が 1 人、他カンボジア人の約 60 人で構成されていました。



みんなでメガネのポーズ。みんな明るくて楽しいクラスでした。

この写真は西洋文学の最終授業日に撮影。

制服は白または水色のシャツに、男子は黒いズボン、女子は黒いスカート。どれを着るか正式に決められているわけではなく、それぞれ市場で指定された色の服を買います。

授業

私のクラスの授業はすべて午前中で1学期は月～土の7時から10時で1日1科目、2学期は月～金で木曜のみ7時から12時で1日2科目、そしてどちらの学期も午後には英語の授業がありました。クメール文学や文化だけでなく、タイ文学や中国文学、西洋文学など他国の文学も科目としてありました。13世紀にアンコール王朝のカンボジアを訪れた中国人の周達観が記した『真臘風土記』の講読や、西洋の格言を読み解く授業もありました。

教材や講義はすべてカンボジア語のため、はじめは出欠確認の自分の名前を聞き取ることができないほどに何もわかりませんでした。何よりも辛いと感じたのは先生のジョークをクラスメイトと一緒に笑えないことです。みんなが楽しそうにしている中、自分だけ苦笑いしているときは少しさみしくなりました。

このままでは目標を達成できなくなってしまうと思い、対策を立てることにしました。まずは教科書の範囲を予め読んでおくこと。ほとんどの科目が教科書に沿って進むため予め読んでおくことで少しついていくことができるようになりました。また、どの授業も先生の雑談タイムがあるのでその時間に隣に座っている学生にわからなかったところを聞き、なるべく置いていかれることがないようにしました。授業後もお昼を食べる時間に友達を捕まえ、わからなかったことを質問して次の授業に備えました。みんなとても優しいのでどんなにしつこく聞いても、あの手この手で私が理解できるまで説明してくれます。授業によっては毎週個人レポートを出さなければならないので、放課後も友達に残ってもらい付きっきりで教えてもらいました。1年間1度も嫌な顔をせず助けてくれた友達には感謝してもしきれません。



言語学の授業での発表。全く役に立てませんでしたが、少し発表の場に立たせてもらいました。みんな原稿を添削してくれて、私の拙いカンボジア語を一生懸命に聞いてくれました。



授業で学んだ文学作品を劇で発表する課題もありました。グループごとに時代が決められ、その時代に合わせた劇をします。私たちはフランス統治時代のカンボジアを描いた『獣の村』という作品を扱い、私は夫を探す妻役を熱演しました。

ただどんなに頑張っても大変だったのが、書き取りです。これはただの単語や文の書き取りではなく、先生の授業用ノートを音読するのをすべて聞き取って、書きとるのです。授業によってはノート 2、3 ページに渡りました。これはかなりハードだったため、リスニング力試しのような気軽な気持ちで授業を受け、授業後に友達にノートを借りることで乗り切りました。とても大変でしたが、1 番語学力向上を感じられる授業でもありました。ほとんど聞き取れた日はとても充実した気持ちでした。また、留学生であっても中間試験、期末試験を受けなくてはなりません。カンボジアの試験は論述方式が多く、たくさん書くことを期待され、留学生にはとてもハードルが高いです。私も試験前にはいつもより勉強し、友人たちに協力してもらいながら、なんとか乗り越えました。

友達

留学中は基本的にカンボジア人の友達と過ごすようにしていました。授業後は一緒にお昼を食べ、何を言っているのかわからなくてもおしゃべりの輪に入る、これだけでかなりリスニング力、推測力が上がりました。はじめのうちはただニコニコ隣に座っているだけでしたが、そのうち冗談を言ってみたり、友達にちょっかいを出してみたりすることで、みんなの扱いが「留学生」ではなく「友達」に変わっていくのがとても嬉しかったです。



いつも一緒にお昼を食べていたメンバー。常に笑いが絶えず、とても楽しい時間でした。
カンボジア人は食べるのがとても速いため、置いていかれないよう私はいつも食べることに必死でした。

ランチタイム

10 時に授業が終わると早めのお昼ごはん、人によっては遅めの朝ごはんの時間になります。学食へ行ったり、持ってきたお弁当をみんなで食べたりその日によって様々ですが、一緒に食べるメンバーは基本的に同じです。カンボジア人にも仲良しグループがあり、たまに抜けたり入ったりするので日本と同じように複雑な人間関係があるようです。

お弁当の日は日陰を探し、ピクニック形式で食べます。カンボジアのお弁当は少し日本と違います。みんなおかずを 1 品と自分の食べる分のご飯を持ってきて、おかずを輪の真ん中に置きます。そのおかずは自分の分を自分で食べるのではなく、みんなでみんなのものを食べます。そうすることでいろいろな味を楽しみながら、作る手間も減らすことができます。みんなでおしゃべりしながら、1 品 1 品違う家庭の味を食べることができるお弁当の時間は私の 1 番好きな時間でした。



真ん中におかずがずらりと並び、それをみんなで囲んで食べます。カレーや野菜炒め、炭火で焼いた肉などメニューは様々ありますが、たまにメニューがかぶってしまうこともありました。

放課後や休みの日もあまり友達同士で遊びに行くということはなく、学校で集まって日陰でおしゃべりすることが多かったです。ムチューという熟れていない果物を塩と唐辛子を混ぜた調味料につけて食べるおやつや、屋台のフルーツジュースを飲みながら日が暮れるまでおしゃべりしていました。用がある人は先に帰ったり、眠たい人は昼寝をしたりと自由に過ごすスタイルで、私はよく遅くまで友達とおしゃべりをしていました。このおしゃべりも語学力向上だけでなく、カンボジア人学生の考え方を知る大切な時間でした。たくさんの時間を一緒に過ごした友達は日本に戻った今でもよくチャットしたり電話で話したりしています。



ムチュー

マンゴーやグアバなど色々なフルーツが入っています。ヘルシーで安くてとても美味しいです。

大変だったこと

私はホームステイをしたので、安全面や食事に困ることはなく暮らしていました。日本食が恋しいときや必要なものがあるときは、日本食レストランやイオンモールに行って日本を感じることでホームシックになることもあまりありませんでした。大変だったのはトイレが詰まることとシャワーが水しか出ないこと、交通渋滞がひどいことでした。

交通手段は自転車を使い、暑いときや遠くまで行くときはトゥクトゥクに乗っていました。カンボジアは交通ルールを重要視していない人も多いので、歩くことも自転車に乗ることも容易ではありませんが、慣れてくると、いろいろな屋台で寄り道する余裕もできて楽しいです。トゥクトゥクはアプリで簡単に呼ぶことができ、価格も安いので暑いときはよく乗っていました。



1年間お世話になった自転車。

道がデコボコなためよくパンクをしたり、ブレーキが効かなくなっていました。

地方への旅行

2月の春節にクラスを含めた70人ほどで、モンドルキリというカンボジアの北東に位置する州へ学外研修に行きました。モンドルキリ州は少数民族が半分以上を占める州で自然が豊かなところです。そこでは地元の高校生にちょっとしたスピーチをしたり、有名な滝の近くで少数民族の衣装を着せてもらったりしました。普段一緒に勉強している友達と過ごすのは特別でした。宿泊費を抑えるため、2つのベッドで5人で寝たのも良い思い出です。残念なことに学外研修の途中で体調を崩し、病院へ行かなくてはなくなりましたが、ここでも友達に助けられ、なんとかプノンペンへ戻ることができました。



モンドルキリの滝の前で、みんなで少数民族の衣装を着て写真を撮りました。
布を紐で縛っただけの簡易的な作りです。

また1年間で4人の友達の家で短期のホームステイをさせていただきました。どの家も伝統的な高床式の家でした。特に驚いたのが水浴び場が外にある家です。外から丸見えのため、体に布を巻き水瓶に入った水を体にかけます。または川でシャンプーや歯磨きをしました。



タケオ州にある友達の家に友人たちと行きました。
高床式の下でその日の夜に食べるBBQの準備をしています。

お別れ

帰国日にはたくさんの友達が見送りに来てくれて涙の中のお別れとなりました。改めてたくさんの人たちに支えられてこの留学生活を送ることができたのだと実感しました。

カンボジアという異国で一年間生活し、学校に通うことで得られたものは語学力向上や文化理解など言葉に表せるものばかりではありませんでした。多くのことを吸収し、体験し、成長することができました。この留学で私は「帰る日に帰りたくないと思えるような日々をすること」という目標を立て、この目標を大切に日々を過ごしました。達成欄にはハナマルをつけたいと思います。

-カンボジアで過ごした 10 ヶ月

国際社会学部

石川遼太郎

私は 2018 年 9 月から 2019 年 6 月の 10 ヶ月間、カンボジアの王立プノンペン大学に留学しました。以下に、私がカンボジアで過ごした経験を 1. 学業・学校生活 2. 日常生活 3.まとめ の順で紹介したいと思います。

1. 学業・学校生活

私は王立プノンペン大学の開発学部地域開発学科にて講義を受けました。学科生は 20 人ほどで、留学生は私を除いては誰もいませんでした。留学生の多くは留学生専用のコースにて講義を受けるからです。教室に簡易的な机が付いているイスを並べ、教授に直面して講義を受けたり、コの字型にしてディスカッション・グループワークをしたりしました。また、1 講義当たり平均 1~2 回のプレゼンテーションがありました。



授業風景

地域開発学科では、地域開発論をはじめ、統計学や開発経済学、社会学など、地域開発論に通ずる様々な知識を身につける講義を受けることができます。受講する講義はすでに決まっており、自分で選択する形式ではありませんでしたが、英語に関しては自分で受講の有無を決めることができます。

私の学科では、講義は通常午後から行われ、多くても 1 日 2 コマで構成されていました。遅いと 15 時から始まる講義もあり、午前中は自宅で講義の復習や宿題の確認をしていました。英語の講義以外は基本クメール語で行われましたが、講義プリントや配布資料以外の参考書や教本は英語で書かれているものが大半を占めていました。その為、講義内容は理解できるが教授の言っている事がわからないという事が多々ありました。しかし、その都度学友に何を話しているのか質問すると、すぐに簡単な言葉に直して教えてくれました。そうした事を繰り返しているうちに教授の話が理解できるようになったと思います。

また、お互いシャイな気質があったためか、初めは必要最低限の会話しかできませんでしたが、人当たりがいい学生ばかりで徐々に仲良くなることができ、空いた時間は談笑したり露店散策をしたりと、交流を深める事ができました。学期終わりに

には学友と共に日帰りで遠出をしたりレジャー施設で遊んだり、思い出に残る良い経験ができました。

2. 日常生活

私はプノンペンに住む、ネイティブの先生の姪夫婦のお宅にホームステイさせていただきました。個室を貸していただくことができ、トイレ・シャワーは部屋に完備されていました。エアコンも付いており、家で過ごす分には日本と変わらない生活ができたと思います。食事は基本、ホストマザーが用意してくれ、クメール料理を中心に様々

な料理をいただく事ができました。料理はどれも美味しく、健康に過ごすことができました。ホストファミリーも皆優しく、地方の農園や大型商業施設に連れて行ってくれたり、とても気にかけてくれ、ストレスなく過ごすことができました。

プノンペンには、大型商業施設もあり、近場にはマーケットが点在していたため、モノに困ることはありませんでした。大型商業施設には日本企業のものがあり、その中には 100 円ショップや雑貨屋が出店しており、日本に比べて少し値は張りますが品質が良いものを購入することができます。納豆などの日本製の加工食品は値段が日本の 2～3 倍と割高ですが、日本食が恋しくなればここで手に入れることができます。

マーケットではスーパーで売られている値段よりやや安くモノを買うことができますが、たまに品質が悪いものやボッタクリ価格のものが置いてあるので注意が必要でした。また、私は遭遇したことはありませんが、マーケットにはスリがいることが多いので、貴重品やバッグは取られにくい場所にしまいか体の前に背負うようにしていました。私がよく行っていたロシアンマーケットは、夕方過ぎから多数の料理店が営業を始め、美味しい料理を安くいただくことができました。



学期終わりの遠出



ロシアンマーケット

日常生活で一番大変だったのは、移動でした。インフラ整備が未発達で、時間帯によってはほぼ必ず渋滞に引っかかりました。信号が少なく道も狭いため、皆が我先に行こうとひしめき合っていました。カンボジアでは原付バイクが主流だったため、わずかな隙間でさえ強引に進もうとする人ですぐ埋まってしまいます。後ろから軽く衝突されることも多く、轢かれてしまった人も目撃しました。そのため、カンボジアで移動する際は無理のない程度に、渋滞する時間帯は極力外出を控えるよ

うにしていました。

3. まとめ

10 ヶ月のカンボジア留学を通して、クメール語の上達、現地生活・現地文化の理解を進めるという目標を達成することができました。クメール語に関しては、まだまだ聞き取れないことやパツと言いたいことが出てこないがありますが、長期にわたってネイティブのクメール語に触れられたことはさらなる語学力向上に繋がる良い経験になったと思います。また、直接現地の生活や文化を体験したことは、自分のカンボジアに対する考えを変え、異文化理解の重要性を改めて認識することができた機会になりました。10 ヶ月ではありましたが、この経験は、今後の生活やキャリアに大きく関わってくる価値のあるものであると感じました。

最後に、留学の機会を与えてくださった先生方や、留学支援をしてくださった先輩、大学職員の方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

-行って、感じて、変わった世界

言語文化学部

吉田篤史

私は 2018 年 9 月から 2019 年 7 月までの 10 ヶ月間、王立プノンペン大学社会人文学部国文学科 2 年生に留学した。以下、私のカンボジアでの経験を 1. 授業 2. 学外活動に分けて紹介する。

1. 学業

カンボジアの大学の特徴は、日本の高校のように大学側がすべて受ける授業を指定しており自分で履修を組むことができない点、そしてそのためクラスメイトが存在するという点だ。私が留学していた国文学科 2 年生のクラスは学生数が 60 人弱、そのうちカンボジア人が約 50 人、残りがベトナムからの留学生という構成で、国文学科としては一般的なクラス編成だった。

授業はパーリ語やサンスクリット語、石碑研究、インド神話といった日本では学ぶことができないものが多く、そしてどの授業も専門性が高かった。そのため毎日の予習復習は欠かせなかった。

だが、たとえ授業準備をしっかりととしても授業についていけるかは全くの別問題であった。留学開始数か月は先生の話す内容が聞き取れず教科書を読みこなすのも一苦勞で、肝心の授業理解も全く追いつかなかった。実際、11 月に行われた初めての中間テストでは、皆論述式の解答を A4 解答用紙両面 3 枚びっしりと書いているにも関わらず、私は半ページしか書けなかった。「自分以外みんな理解している」という状態は精神的に大きな負担になった。

グループワークやプレゼンも多かった。だが、教授の課題の説明を聞き取ることができず、そもそも何をすべきなのかわからないということも多く、そのため課題に取り組むにはクラスメイトからの協力は欠かせなかった。クラスメイトは本当に親切で、毎回私の担当が少なくなるように割り振ってくれたり、レジュメと一緒に作成してくれたりと常に私の課題や日々の勉強をサポートしてくれた。

友人からのサポートを受けながら、慣れないながらに授業、文献読解、プレゼンを何度も繰り返しているうちに徐々に授業内容も自力で理解できるようになった。また、第二セメスター以降教授が



友人の授業ノート 毎授業後写真を撮り自分のノートに書き写し授業内容を理解するのが主な勉強方法だった

ら指名され意見を求められることも多くなり、クラスメイトからも授業に関して質問されたりと、カンボジア語を瞬時にアウトプットする機会が増え、結果的に語学力の向上に繋がった。

2. 学外活動

授業がすべて午前中で終わり尚且つ祝日も多いことから、授業後や休日は現地駐在員の方々に連絡を取り積極的に交流を図った。

近年経済発展が著しいことから、農業、教育、医療、通信といった様々な業界で日本企業がカンボジアに進出している。そのためお会いした駐在員の方々の職種も多種多様。お話を伺って見えてきたのは、大学の講義からは感じ取ることができないもう一つのカンボジアの姿、つまり著しい経済成長やカンボジアでの日本企業の状況、そして進出企業がカンボジアにもたらす変化だ。

国際支援系の分野では青年海外協力隊や NGO 職員の方と交流を持ち、事務所に訪問し月例会議に参加させて頂いたこともあれば、活動現場である小中学校、農村部のヘルスセンター、州立病院、そして教員養成学校等様々な現場に赴き、実際の活動に直に触れることもあった。国際支援と聞くと聞こえは良いかもしれない。しかし、実際の支援現場は我々の予想よりはるかに複雑で支援も一筋縄にいかない。それでも、例えば変化が目に見えなくても、日本からの ODA が決まったり物的支援が行われていたり、着実に進むカンボジアの姿を目にすることができた。

「例えば目立った変化がなくても、例えば建物が古いままでも、この国は一步步進んでいる」。NGO 職員の方の何気ない一言が忘れられない。



フィールドワーク 1

青年海外協力隊活動視察。プノンペンにて



フィールドワーク 2

クラチエ州農村部での医療ボランティアへのインタビュー

最後に

留学に際し、私は事前に一つの目標を立てていた。それは「カンボジアを文献からではなく自らの経験を通して理解する」というものだ。

もちろん留学前から留学生との交流や講義等を通してカンボジアに対する理解を深めていた。しかし、一步現地に踏み込むと、そこに広がるのは講義や文献、留学生との対話からは読み取ることができない、経済発展著しい、複雑で、奥深く、そして魅力にあふれたカンボジアだった。

この 10 か月間の留学で痛感したのは現地を見る大切さだ。例えば文献を読み込んでいても、それは一部の理解にとどまっているだけなのかもしれない。留学を経て卒業論文のテーマも明確にすることができた。今後は留学で培った語学力とカンボジアに対する深い理解、そして現地主義を貫きながら卒業論文執筆に向け努力していきたい。